よなべ

YONABE

Vol.1

WORK at NIGHT

よなべ＝チーム夜営メンバーが夜な夜な仕上げた仕事のごった煮。

20.1 kH
Shuya kumagai
P 19 - 20

サービスタイム
Hiroki Kobayashi
P 09 - 12

So Fine
Satomi Takazawa
P 23 - 28

小林峻也の
ケバブ食べ歩きへ
ようこそ in Berlin
Takaya Kobayashi
P 03 - 06

Sleeping double helix
Ai Teramoto
P 13 - 14

シシマイのいた國
Ryuhei Otake
P 21 - 22

変
Yuna Hagiwara
P 07 - 08

RECOMMEND
Team YAEI
P 29 - 30

OFFSTAGE
Ai Teramoto
Ryuhei Otake
P 15 - 18

YONABE Vol.1

表紙・目次イラスト / 田口ともは
企画編集 / チーム夜営
デザイン / 大竹竜平
発行日 /2017.7.15
発行 / チーム夜営
team-yaei.com
teamyaei2014@gmail.com

KKYB

小林峻也のケバブ食べ歩きへようこそ in Berlin

takayainberlin.blog.fc2.com

ここは、2016年10月からベルリン在住の舞台美術家である筆者が当地で観劇した演劇作品の感想を語っていくコーナーです。日ごとに様々な劇場に出向いては、帰り道にそこいらで買ったケバブを貪りながら脳裏にめぐらせた感想文とお考え下さい。なお作品解釈などは完全に私見に基づいたものである旨、ご了承下さい。初回は、ベルリンの演劇シーンで常に目立っている劇場の中から、Maxim Gorki Theater、Volksbühne am Rosa Luxemburger Platz に出かけましょう。

1

Atlas des Kommunismus
2016/10/09
Maxim Gorki Theater

Maxim Gorki Theater はウンターテンリンにあり、座席数は440席。ベルリンの公共劇場の中では最も小さな劇場です。

この劇場が現在の名前でスタートしたのは1952年、すでに共産主義国家東ドイツの首都となっていた東ベルリンでのことです。建物が完成したのはさらに時代を遡って1827年、ベルリン歌唱アカデミーとして建てられました。このゴーキ劇場は、ベルリンでも最も政治的にアクティブな作品を上演することで有名です。最近では、とくに移民の問題を扱った作品が目立っています。

2016年10月現在は「UNITING BACKGROUNDS・Theater zur Demokratie」というプログラムを展開しています。今回観劇した作品は、その最初を飾るものでした。

劇場に入るとびっくり。既存の客席を一席も使用せず、その上に浮かぶように特設の客席が組まれていました。

そして席についてみるとまたびっくり。

舞台の後ろ側にも、鏡写しのように同じ形の観客席が組まれています。普段はいわゆる奥舞台になっているところを客席にし、その分舞台はプロセニアムから前方に張り出して、そのまま僕の座った側の客席につながっている。舞台を二つの客席が挟んでいる格好です。客席も舞台も無塗装の厚ベニヤでできており、心地よい仮設感がありました。

役者は7人。ワークショップ風なシーンから始まり、彼らが観客に向けて自己紹介をします。

年齢は8歳から80代まで様々で男性は一人。若い世代以外は皆、かつて東ドイツにくらし、共産主義を個人的なルーツとして（あるいはその一部として）持っている、プロの俳優ではない一般の人たちだということがわかります。（中に一人だけ女優がいます。彼女は1989年にまさにこの劇場で上演されていた、「移行社会」という作品の出演者の一人だったということが劇中で明かされます。これは当時目前に迫っていたベルリンの壁崩壊を予見したかのような内容で知られる作品です。）

まずは、大戦中にユダヤ人としてオーストラリアに亡命し、戦後、理想郷を夢見て共産圏となった東独に帰ってきたというお婆さんが、自己の体験を語り始めます。

その後語り手が次第に若い世代へと移っていき、2時間の上演の中でフォーカスされる時代が、東ドイツの建国から壁崩壊、統一後のドイツへとシフトしていく。淡々と進むのに単調に感じない、見事な構成でした。当時の情景をユーモラスに描く演出もあり、彼らの過去を教科書のモノクロ写真のようには見せないという意図が感じられました。

語りに合わせて、彼らの昔の写真（本物）が書画カメラで映し出されて、かつての時代が個人的な体験として浮かび上がってくる様は、そっとするほど新鮮なものでした。書画カメラのところにいる係の人は、だれかがセリフを忘れると台本を読んでくれたりも。（全体的にそういうラフな感じで進んでいきます。おばあちゃんがセリフを思い出せると拍手が起こる）

中には同じ共産圏だった祖国から東独に留学生としてやってきて青春時代を送ったのち、壁が崩壊、統一直後の経済的な低迷の中、今度は外国人に向けた差別やテロ攻撃の対象となった経験を持つ、ベトナム人女性もいました。

「Ausländer raus!（外国人は出て行け！）」という叫びの中、彼女の住んでいた集合住宅の写真が書画カメラの下で実際に燃やされるシーン（1992年に旧東独のロストックで、外国人の集合住宅に暴徒化した市民が詰め寄り放火される事件が起こりました。彼女はその時の事を実体験として語っています）は、本当に心が冷たくなる思いでした。

これは現代のドイツで、難民の受け入れに強硬に反発する急進右派が台頭しているのを考えると、決して過去の他人事ではありません。この作品を含むプログラムは、そのような現状を踏まえた上で企画されたものだということも明らかです。

作品全体の感じとして、「共産主義」というものを単なる政治的なイデオロギーとして一括りに語ることへの違和感、あるいはそのような視点では見逃されてしまう個人の記憶にきちんとピントを合わせること。それらがテーマとして強く感じられました。

技術的に面白かったのは、スクリーンの使い方でした。

ちょうどプロセニアムが、舞台の真ん中くらいの位置にあり、そこからスリットの入ったのれん状の、白いビニールのスクリーンが降りてきます。のれん状だから、完全におおし切った状態でもあちらとこちらで行き来ができる。

スクリーンのあちら側にいて見えない役者の顔は、ライブカメラを使って撮影し、こちら側のスクリーンに投影されます。それにより、あちら側とこちら側で映像を通して会話するというシーンが生まれていました。これがすごく面白かった。

つまり舞台を挟んでいる客席のどちらに座っても、話の流れそのものは同じように観劇できるものの、その印象は微妙に違ってくるというわけです。

演者の中には8歳の小さい女の子がいて

「わたしは、きょーさん主義？なんて今日はじめてききました」

と言って和ませてくれるシーンもありました。

共感という網で、個人の精神の救済を試みること。

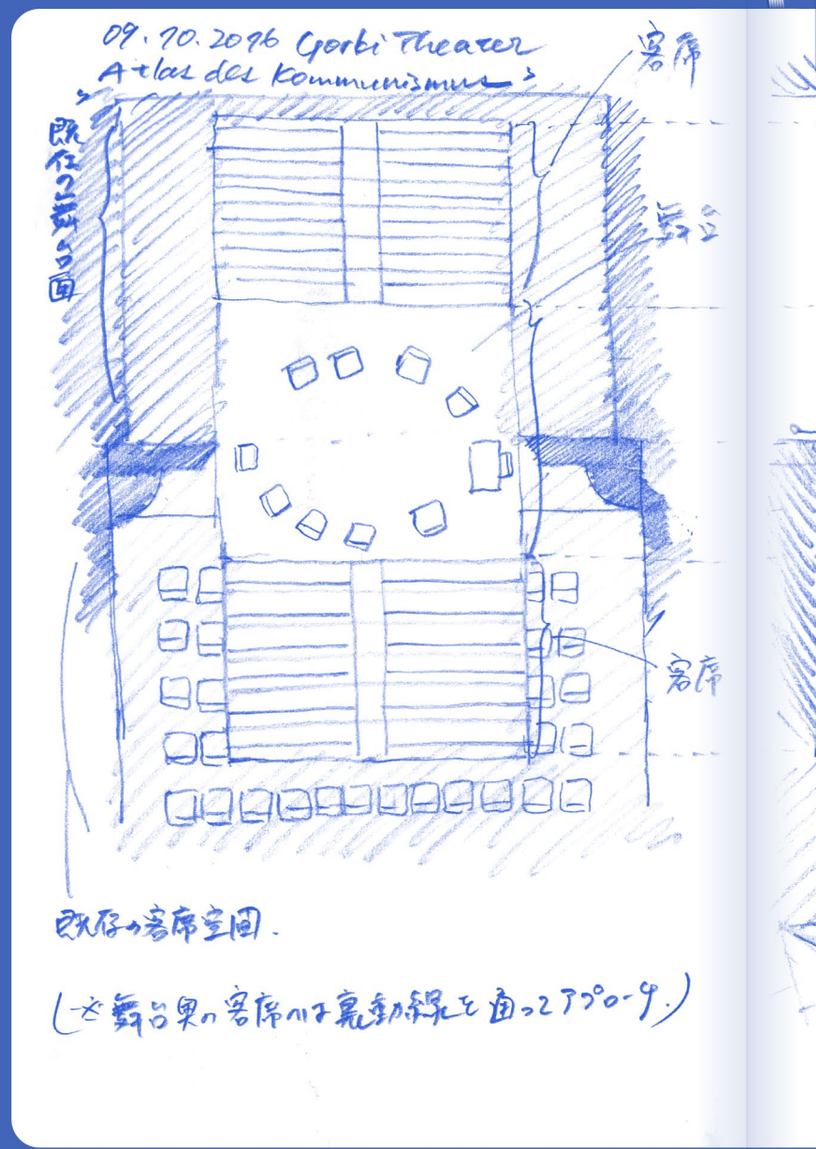
僕はこれが、劇場というものの使命の一つだと感じています。

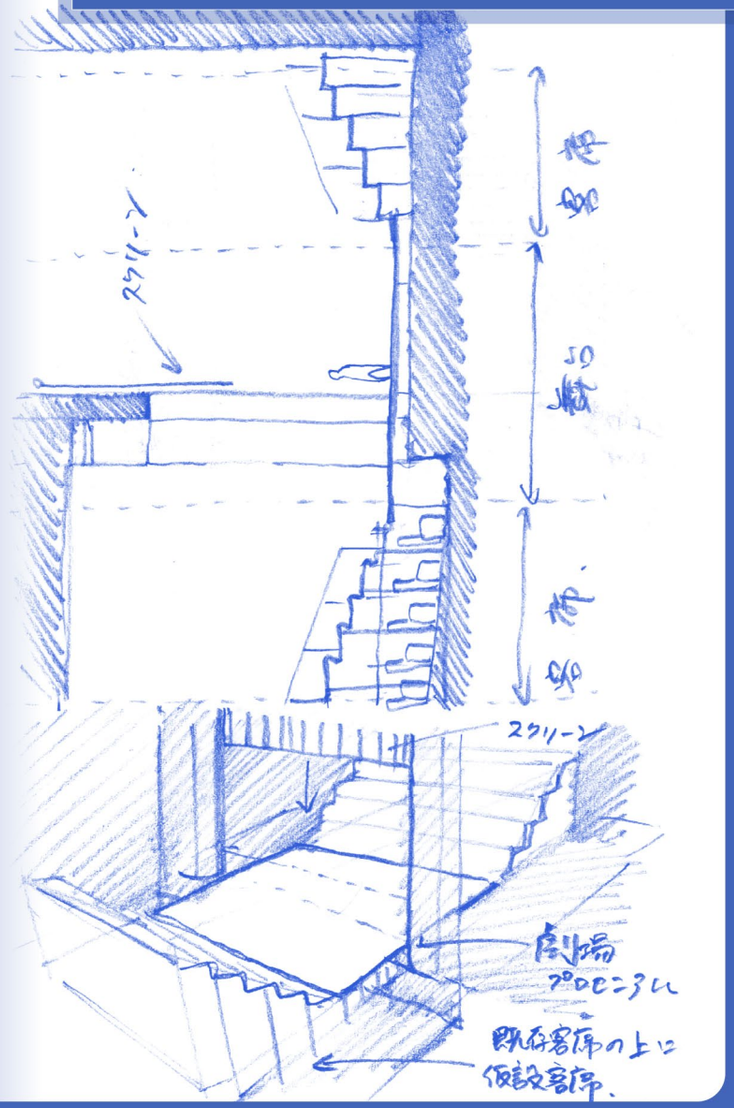
ドイツにきて早速、このような優しい作品に出会うことができてよかった。

でもそれには同時に、かなりの勇気と毅然とした態度が必要だということを思い知らされる一文が、プログラム冊子の裏表紙に載っていました。

「当劇場は、急進右派に属する者、過去あるいは現在において人種差別主義者やナショナリスト、反ユダヤ主義の団体と通じた者等の入場を拒否する権利を行使し、固く禁じる」

いわゆる「政治的な演劇」の伝統が長いドイツですが、昨今の難民危機、欧米を中心とした反リベラル的な思想や排他的なナショナリズムの再興という難しい時代局面に際して、社会の進むべき道、また芸術の果たすべき役割についての模索の動きが、一層強まっている。あるいは、そのようなテーマを語る演劇や、芸術表現をめぐる社会的な緊張感が高まっている、と言ってもいいかもしれません。





KKYB

2

Die Kabale der Schein heiligen
- Das Leben des Herren Molière
2016/11/05
Volksbühne am Rosa Luxemburger Platz

今回は、ドイツ演劇界の巨匠フランク・カストルフの作品を観劇してきました。

4時間を越す大作と聞いて、覚悟して観に行きました。でも結局、19時半ごろに開演して、休憩を挟んで終演したのが24時ごろだったような気が。あれ…6時間くらいあったのでは…？券面上は19時開演。開演時刻を5分ほど押して開場し、客席が落ち着いたタイミングでカストルフ氏が舞台上に登場。「実は19時まで稽古をしていました。いや、フォルクスビューネではよくあることなんですがね…」といって開場を沸かせていました。

お話は、超基本的には、フランスの劇作家モリエールの生涯について。舞台上には、プロセニアム開口いっぱいのタッパを持つ巨大な山車が置かれていました。昔のサーカスか旅劇団がそれを引いて移動しては、行く先々で喜劇の公演をしていたのだろうなあ、という想像が膨らむ感じです。車体の側面にバッタン！と格納できるような舞台が、山車から張り出しています。山車の中にはちょっとした空間があったり、屋上に登る階段がついていたり、小さな馬車が吊り下げてあったり…とにかく作り込まれた、巨大なセットです。

それとは別に、装飾的なテントが二つ。そして大きなLEDスクリーンが舞台上に鎮座しています。シーンごとに、装置の配置は変化します。（フォルクスビューネの舞台は大きな盆になっていて、場面転換に使用されます）

客席に一番近い前舞台には、藁のようなものが敷き詰めてありました。

さて、お話はというと…

すみません、さっぱりわかりませんでした…!!

こんなこと書いていいのかなっ、というか全然観劇レポートになってないじゃんって感じなのですが、自分の現時点でのドイツ語力ではこの作品のテキストはほとんど断片的にしか理解できませんでした。前述したとおり、基本的にはモリエールの生涯をモチーフとしたテキストなのですが、内容が高度すぎて全く話についていけない。休憩中に大学の友達がおしえてくれた所によると、作品中では難解なテキストに加えて、現代ドイツの演劇界をネタにした高度なジョークや皮肉が飛び交っているとのこと。

まあわからないってのも一つの個人的事実であり感想であるので、ここではそのままに書いておきます。それに、演劇を観るという行為は、何もセリフを理解することが全てではない、と僕は信じています。言葉がわからなくても、その演出において自分に理解出来るものを理解すればいいし、知覚できるものを知覚すればいいのです。言葉は演出された時間・空間の中では、一つの要素にすぎないはず。

この劇の演出で目立つのが、ライブ映像の使用です。

舞台上には二つのテントがあり、客席からはその中が見えません。そして大きな三つの装置の周辺には死角も多い。そのような空間で行われる演技を、カメラマンや音声クルーが巧みに追いかけて撮影・集音。それがリアルタイムでLEDスクリーンに投影されます。作品全体の半分くらいが、この方式で見せられていたと思います。カメラは複数台あり、その場で映像の切り替えも行われていました。

このカメラを使った演出については、カストルフ氏の得意とする技法であるようなのですが、非常に興味深いものがあります。というのも、フォルクスビューネの舞台は大きく、俳優が一番奥まで行ってしまうとその姿は本当に小さくしかみえません。しかしカメラのおかげで、俳優はその広大な舞台空間を縦横無尽に動き回ることができてしまうのです。

通常、舞台の奥に広がる空間は、主要な演技の場にはなりにくいものです。というのも、プロセニアム型劇場の断面図を考えた時、高い階層の客席からは、舞台の奥は、プロセニアムアーチの上部に隠れて見えないことが多い。平面図を考えても、同じくサイトラインの関係で、すべての観客から見える舞台空間は、舞台前方から奥へと狭まっていく三角形・あるいは台形の空間です。つまり、プロセニアム型の劇場においては一般的に、演技空間として効果的に使用できるのは、比較的客席に近い部分に限られる。舞台奥の空間は、俳優が立ってそこでセリフを言ったりする場所ではそもそもないわけです。

しかしこのカストルフの技法では、そこにいる俳優の表情がどアップで巨大なスクリーンにうつります。そしてその表情の微妙な変化が、観客を笑いの渦に巻き込んだりしているのです。この演出をみていると、舞台空間というものの解釈が、大きく広がっていくように感じられました。

プロセニアムアーチは本来、舞台上に構築された世界を観客が覗くための窓となるものです。これは19世紀、写実的かつ立体的な舞台装置が好まれるようになった「自然主義」の時代に決定的になっていく考え方です。もちろん演劇的なイデオロギーは20世紀に入ってから様々な展開をみせ、自然主義的な舞台装置そのものは次第に時代遅れになっていくものの、写実的な舞台表現は現代においても好んで使用されています。

そのためプロセニアム劇場の舞台空間は、「お客さんからちゃんと見えること」というシンプルでも決定的な条件によってかなり厳しくその使用方法が限定されてきたし、それは演劇的なイデオロギーの様々な発展を経験した現代においてもあまり大きくは変わっていないと思うのです。というかそれが、プロセニアム劇場という空間の宿命だったわけですが。

そしてそのような条件のもとでは、舞台面は、そこに構築される虚構の世界を物理的に支えるための「床」としての役割に徹するしかありません。極めて物理的に。

カストルフ氏の技法は、そのような条件を軽々と超えてしまっている気がするのです。舞台面を奥の壁までめいっぱい使用できるようにすることで、舞台上にある空間が、単なる演劇世界の物理的な支持体ではなく、そこに表現された「世界そのもの」に見えてくるのです。この作品では、装置はあえて装飾的で時代色が強くデザインされていますが、その間の空間には何もなく、背景には真っ白いホリゾントしかありません。舞台装置の間にあるニュートラルな空間が、劇空間そのものとして立ち上がってくる。これはよく考えると、純粋な驚きです。

それに舞台上に入り込んで自在に動きまわるカメラが、観客それぞれの「第二の目」になっていることも重要です。舞台と客席は従来通り区切られているにもかかわらず、観客は（すくなくとも僕という一観客は、ですが笑）、舞台上の「世界そのもの」を、自由な視点を持って探索している気分になるのです。これは、窓の奥にある虚構の世界を客席から覗き込むといういわゆる自然主義的な観劇体験とは、まったく違うものでした。

さてこの日立ち寄ったケバブ屋はこちらです。

Zoologischer Garten 駅の地下にあるBISTRO AVCI。アヴチ？ってなんだろう。

ここのケバブは、チリソースが優しめで、味付けが全体的に優しい感じ。特筆すべきはお肉をチキンかビーフか選べることですかね！珍しいのでチキンを注文しました。うん、美味でした。あとここはサラダの他に、小さめにカットして鉄板でソテーしたジャガイモを入れてくれる、「芋入り」と僕が勝手に呼んでいるパターンです。これ、満足感が結構違うんですよ。この駅はベルリン観光に来たら必ずよると思うので、お立ち寄りの際はぜひどうぞ。

虎の威を借るおじさん

私がレンタル・ビデオショップでアルバイトをしているとき、
一人のおじさんに「すいません」と声を掛けられる。
大抵、こういうときは、「このＤＶＤどこのコーナーにありますか？」とか、
「もう〇〇の最新アルバムは入荷していますか？」とか、
そういった質問をされるのだが。
その四十代半ばくらいのおじさんは、私が近づくなりこう言った。

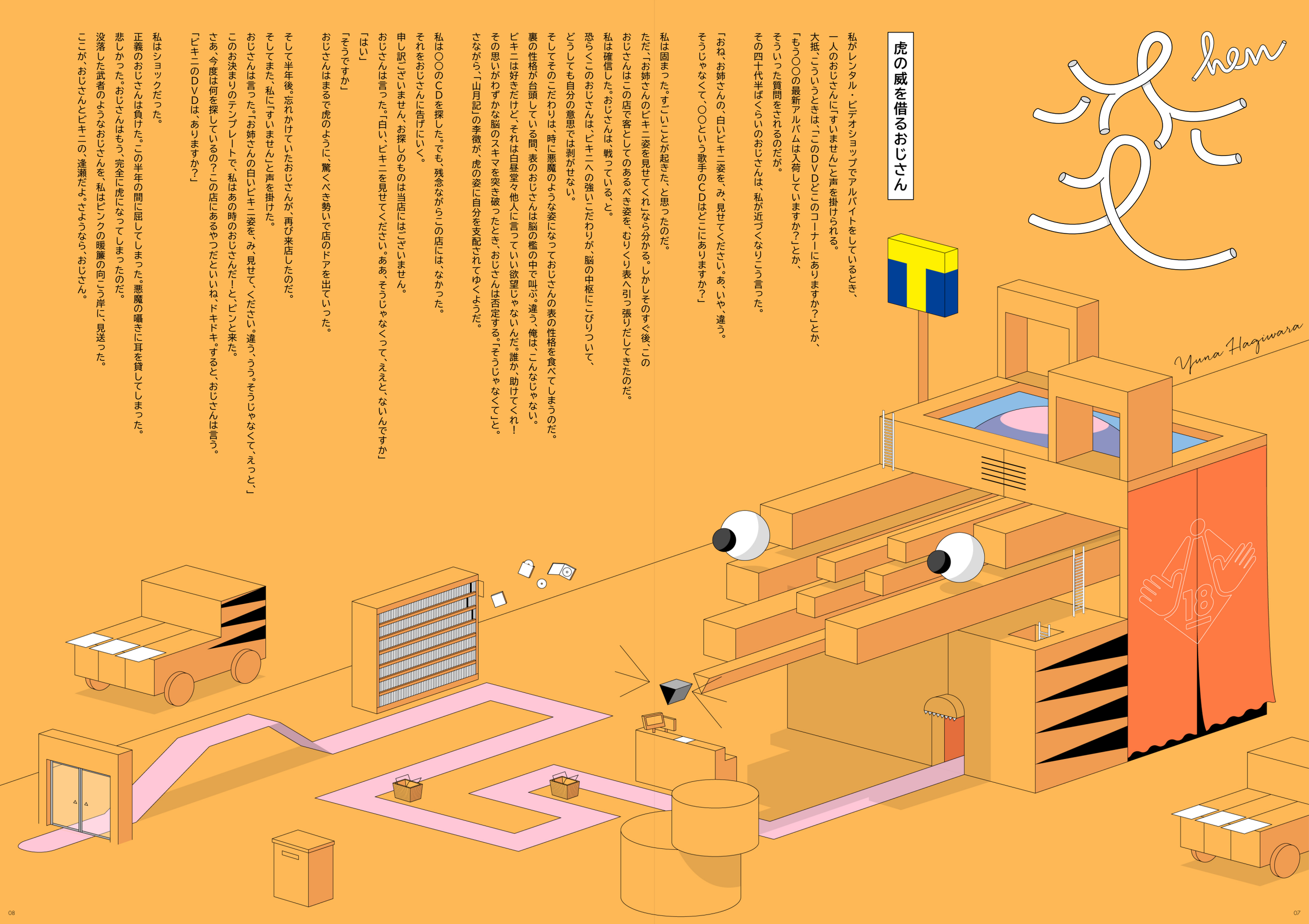
「おね、お姉さんの、白いビキニ姿を、み、見せてください。あ、いや、違う。
そうじゃなくて、〇〇という歌手のＣＤはどこにありますか？」

私は固まった。すごいことが起きた、と思ったのだ。
ただ、「お姉さんのビキニ姿を見せてくれ」なら分かる。しかしそのすぐ後、この
おじさんはこの店で客としてのあるべき姿を、むりくり表へ引っ張りだしてきたのだ。
私は確信した。おじさんは、戦っている、と。
恐らくこのおじさんは、ビキニへの強いこだわりが、脳の中枢にこびりついて、
どうしても自分の意思では剥がせない。
そしてそのこだわりは、時に悪魔のような姿になっておじさんの表の性格を食べてしまうのだ。
裏の性格が台頭している間、表のおじさんは脳の檻の中で叫ぶ。違う、俺は、こんなじゃない。
ビキニは好きだけど、それは白昼堂々他人に言っていい欲望じゃないんだ。誰か、助けてくれ！
その思いがわずかな脳のスキマを突き破ったとき、おじさんは否定する。「そうじゃなくて」と。
さながら、「山月記」の李徴が、虎の姿に自分を支配されてゆくようだ。

私は〇〇のＣＤを探した。でも、残念ながらこの店には、なかった。
それをおじさんに告げにいく。
申し訳ございません、お探しのものは当店にはございません。
おじさんは言った。「白い、ビキニを見せてください。ああ、そうじゃなくって、ええと、ないんですか」
「はい」
「そうですか」
おじさんはまるで虎のように、驚くべき勢いで店のドアを出ていった。

そして半年後。忘れかけていたおじさんが、再び来店したのだ。
そしてまた、私に「すいません」と声を掛けた。
おじさんは言った。「お姉さんの白いビキニ姿を、み、見せて、ください。違う、うう。そうじゃなくて、えっと、」
このお決まりのテンプレートで、私はあの時のおじさんだ！と、ピンと来た。
さあ、今度は何を探しているの？この店にあるやつだといいね、ドキドキ。すると、おじさんは言う。
「ビキニのＤＶＤは、ありますか？」

私はショックだった。
正義のおじさんは負けた。この半年の間に屈してしまった。悪魔の囁きに耳を貸してしまった。
悲しかった。おじさんはもう、完全に虎になってしまったのだ。
没落した武者のようなおじさんを、私はピンクの暖簾の向こう岸に、見送った。
ここが、おじさんとビキニの、逢瀬だよ。さようなら、おじさん。



サービスタイム

小林弘樹

靖国通りを歩いている時、一瞬だけ蝉の鳴き声が聞こえた気がした。土なんかないように思う新宿の街。どこかで7年生きてきた幼虫がいたのだろうか。

電車に乗り込み街を見下ろす。早朝、午前5時42分。昼とは少し違う街の顔。あと2時間もすれば塗り替えられてしまうんだろう。いつもと変わらないその様子を窓から眺め、少しホッとして、少しだけ、ほんの少しだけ寂しくなった。

電車が動きだす。

俺を、　　中野。
私を、　　次の駅へと運ぶ電車が。　次は代々木。
アタシを、　　渋谷。

窓際に立ったまま流れる街並みを横目に携帯を出し、緑色のアイコンが目に止まる。過ぎていく風景に突然喪失感を覚え、ＬＩＮＥのトークを消そうか迷う。最後の彼女の痕跡を見て胸の奥を苛む郷愁は一層強くなった。

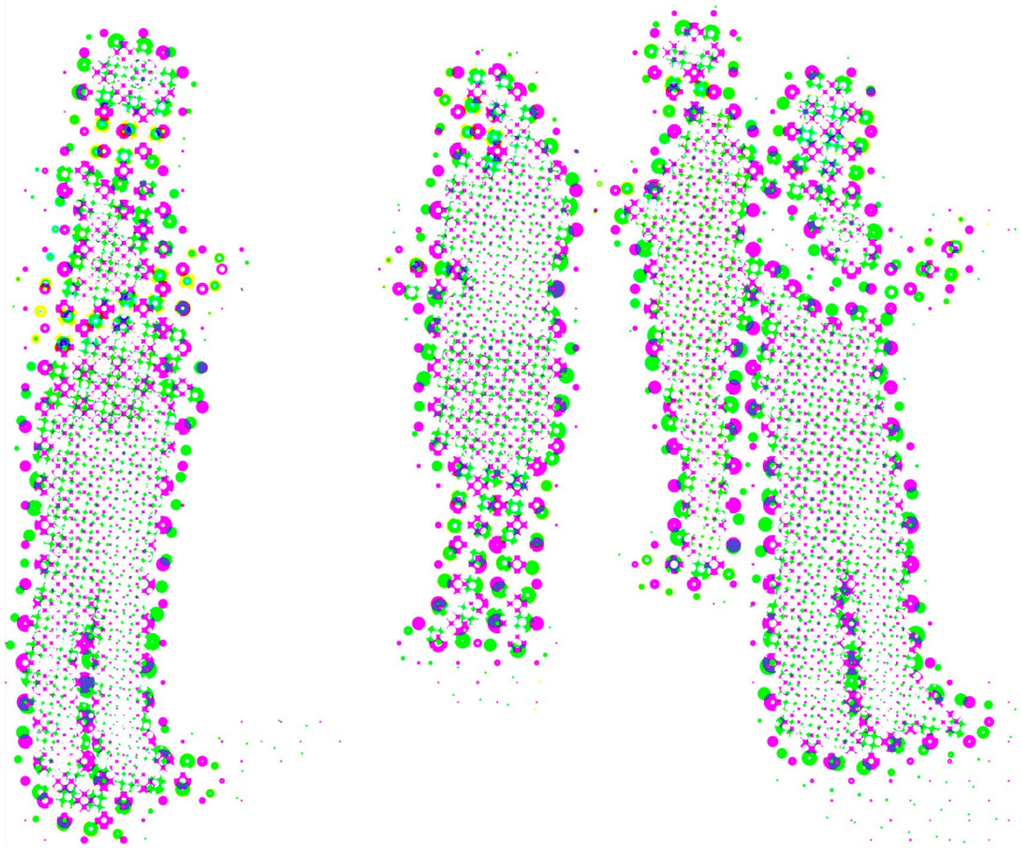
電源を切り、そっと携帯をしまう。

新宿が遠くなっていく。またいつでも会えると彼女は言った。どこでも電車は走ってるし、その気になればどこへだって行けるんだからと。だけどもう会うことはない。漠然と、でもどこか確信に近い感覚を抱いていた。

ドアが開き、人が流れ出す。
アタシは座席に座り、
俺は窓にもたれたまま、
私は次の乗り換えを目指し、

電車は次の駅へと動きだす。

さよなら、あなたも、どうかお元気で。



8月31日

額を伝う汗が目に入りそうになり、反射的に目を瞑り下を向いた。もしかしたら今までのことは全て夢で、目を瞑ったこの一瞬のうちに消えているのではないか。此の期に及んで頭に浮かんだそんな思いは再び視界に入る現実がたやすく打ち消した。視覚だけではない。掴んだ両手から消えていく肉の暖かさ、鼻をつく糞尿の匂い。柔らかな息遣いはもう聞こえない。部屋に重く漂う淀んだ静寂は私の行動と、それに伴う決定的な結末を突き付けていた。まるで機械のように硬直した自分の指を一本一本力を込めて離すと、艶やかな黒髪を床に広げる小さな頭が重力に従ってわずかに傾いた。つい数十分前まで小気味良く動き私の視界を揺れていたそれは、もう二度と自分の意思を持つことはない。息が苦しくなり酸素を求めるように顔を上げる。窓から差し込む光が目に入って、少しだけ意識が世界に戻る。同時に思考に靄がかかり、猛烈に咳き込んだ。どれくらいだろうか。呼吸をしていなかったことに気付く。再び視線を元に戻すと、光を失った黒く大きな両目に対して何か言葉を発さなくてはという焦燥に駆られた。何を？何を話せばいい？

私が震える声で呼んだ彼女の名前は蝉の声に掻き消され、どこにも届くことはなかった。

9月21日

夕方、午後5時32分。新宿の駅から見える街並は、いつの間にかこの時間でもうっすら暗くなり始めていた。心なしか半袖の腕が寒く感じる。もう秋ですな。そんなことをぼんやりと考えながら、8両目2番目の乗車位置。特に何かあるわけではないけどなんとなくの定位置になったそこに私は立つ。地面に印された線、他人の作る見えない枠からはみ出さないように。

ズシリと重たい小さなバッグからiPhoneを取り出しパスコード１２１３。いい加減変えよかなこれ。ブラウザを開いてキニ速にするかVIPPER速報にするか暇潰しを迷っているうちに左隣と後ろには見知らぬ誰かが立って、私を列に閉じ込めていた。キニ速に決定。いや別にどっちでもいいんだけど。

電車がホームに入ってくる。ゆっくり停止するのに合わせて、並んだ見出しをスワイプで流しながら私はドアの横に立つ。訓練されたように、後ろに並んでいた人たちもそれになら う。『【悲報】27時間テレビ大爆死』

ドアが開いて、詰め込まれた人たちが溢れた水のようにホームにこぼれていく。その流れが弱くなったのを見計らって、最後の一人と交差するように体を滑り込ませた。一瞬だけ手元の記事から目を離して素早く左右を確認する。猟犬のごとく。右側に二席。しかし隣のドアから入ってきたスーツたちによって既に制圧されかけている。左側には一席。狙い目！と思ったところでこっちに向かってくる老婆の姿が目に入った。うげ。あまり気持ちのよくない未来が見える。年寄りから席を奪うという行為への良心の呵責とかでは断じてない。明確に、席を譲る対象として認識されている、してしまうレベルの老人に対して、集団が発生させる無言の「譲らせ合い」の空気。お前の方が近い、若い、疲れてない。だから譲るのはお前だ、というような牽制の中に入るのが嫌だった。座りたきゃ優先席行けマジで。

結局どっちも諦めた私はドアの脇にもたれるように立った。この間約2秒。人の流れも緩く停滞し、私は手元の画面を見ながら、不自然に見えないようにさっきの席をチラ見した。案の定、通路のど真ん中で老婆が物欲しそうに揺れている。空いていた席には、私と同じくらいかな、若い女の子が座り、頭にはヘッドフォン、手には文庫本を持ち完全防備。目に宿る光は車内に漂う生ぬるい空気をきっぱりと寄せ付けない強い意志を感じる。これは強い。周りもそれを察知したようで、寝たふりをする、携帯に目を落とす、今日発売のワンピースの新刊を読む、などなど方法は様々だが、皆一様に「老婆に気付いていない」ふりを始めた。珍しい。こういう時は大抵善良ぶった誰かがサッと席を譲り、それが更に周囲一帯の気まずさを増幅させるものなのに。今日は全員が我関せずの臨戦態勢だ。そして気付かないふりをしながら、席を確保した彼女に対しては非難めいた感情を向けている。『宝くじ当たったけど質問ある？』電車の揺れに合わせて老婆が揺れる。座る彼女はページをめくる。もし私が彼女の立場だったらあそこまで平然としていられるだろうか。考えるまでもなくムリだ。耐えきれずに中途半端なタイミングで席を譲り、気まずさを急加速させるのがオチだ。ババアが揺れる・・・どう3して私がこんなことを考えているんだろう。私は座れたわけでもないし全然関係無いのにこういうことを考えるのが嫌だったから諦めたのに・・・そこまで考えて少し嫌な気分になり、８０００万当たったらしいどこかの誰かに意識を向けた。

車内のアナウンスが国分寺を告げる。面白GIFまとめに移動していた画面を閉じ、iPhoneをしまう。ドアが開き、人の流れに乗って歩き出しながら視線を向けると、老婆も座っていた女の子もいなくなっていた。中身が更新された同じ光景を後ろに私は階段を上っていった。

私が国分寺に住み始めてからもう5年が過ぎていた。大学進学に合わせて上京してきた私は、学校にほどよく近いという理由で特に考えずにこの街を選んだ。結果としては割と住みやすいし治安もそこそこで都心にもそれなりに出やすく、間違った選択じゃなかったと思う。パチンコ屋の前を通り過ぎる。2年の夏から3年の春くらいまでここでバイトをしていた。スタッフはほとんど学生で、女子は私を含めて12人中3人だった。入って3日目でその残り2人の女子が複数人のスタッフと肉体関係を持っていることを知った。まだその頃の私はそれなりに綺麗な体と心だったので、割と心の底から彼女たちのことを軽蔑したし、それで平然と動いている店舗そのものが気持ち悪かった。私は9ヶ月そこで働き、耳が少し悪くなり、足腰がちょっとだけ強くなって、辞めるまでに3人と関係を持った。

階段を上り、二番目のドア。バラバラと散らばっている靴を足でどかし、途中のスーパーで買ってきた袋を置く。歩きながら靴下を脱いで洗濯機に放り込む。そういえば洗濯機の中に汚れ物を貯めておくとカビの原因になるってテレビで言ってたような。

ベッドに転がる。窓を開ける。外は完全に真っ暗だ。私は窓の端に寄りかかって煙草に火を点けた。この街に越してきてから自分の中で色々なことが変わった。誰もいない部屋に一人でいるとゴチャゴチャと考え始めてしまう。新宿より2度は低いだろう冷たい夜風を素肌の腕に感じながら、外に向かって煙を吐き出した。キャスター5。煙草を吸い始めたのは確か、パチンコ屋の二人目と付き合っている頃だった。耳

元で囁かれる低い声が好みだった。それ以外はカケラも印象に残っていないような男の痕跡が今も残っているのは正直腹立たしいが、体に煙を出し入れしている時間は好きになっていた。

こういった一人の時間では、たいてい母のことを考えてしまう。煙草を吸っていることはまだ母には言っていない。何もかもを母の意思で決められてきた私にとって数少ない反抗のうちのひとつだ。一番大きな反抗は大学選びかな。ろくな気分にならないとわかりつつ、頭が回るのを止められない。母についての思考はいつも結局2年の夏の帰省に辿り着く。私は無理矢理気分を変えようとiPhoneから適当に曲を再生させた。

BONNIE PINKをバックに夜の空に煙を吐き出す。なんでそんなの入ってたんだろ。短くなった煙草を灰皿に押し当てて、ジリジリと潰した。あの夏の日から3年が経つ。ふと、小学校の頃を思い出した。将来の夢というテーマの作文で、私は何も書けなかった。あの時はたぶん、やりたいことがないというよりは、夢っていうことそのものが理解できない世界のことだったんだろう。スレ立てたら伸びるかな。スレタイは何だろ、母親に洗脳されていたんだが、とか？さすがに寒くなってきたので窓を閉め、ほったらかしにしていた食材を冷蔵庫に入れていく。私の人生はあの日を境に全く違うものになった。あ、やば、冷食買ったんだった。ちょっと自然解凍されてる。ま、いいか。

それから私はなるべく今までやったことがないことをやろうと頑張った。生まれて初めてのバイトはその一月後。お酒も前より飲むようになったし、煙草もまあカウントしていいか。クラブも行ったしセックスもガンガンした。でもそれも完全に自由になったとは言えなくて、「母がやるなと言いそうなこと」を選んでやっていたように思う。突然仕事を辞めたのも、今のバイトだってそうだ。結局私は一生母の呪縛からは逃れられないんだろう。これからもし子供が生まれたりしてもきっと意識しちゃうんだろうな。負の意思の遺伝だ。幼稚園児の私、小学生の私、中学生の私。その姿を子供に重ねてしまうに違いない。歌を歌いたかったよね。絵を描きたかったよね。バスケがしたかったよね。それは私の話だ、子供は関係ない。頭では理解できてても実際できるかはわからんよね。つら。もう考えるのやめよ。もう疲れたのでお化粧だけ落としてお風呂は明日にします。どめんねお母さん、おやすみなさい。

9月26日

ある秋の日、帰りの電車に揺られていると唐突に喪失感が湧き上がった。きっかけが何かはわからない。窓の外を流れる見慣れ始めた街並のせいかもしれないし、掴んだ吊革の感触かもしれないし、この時間には不釣合いな子供の騒ぐ声だったかもしれない。とにかく私の中に久しく感じていなかった感情が湧き上がり、放出されることを望んで胸の奥で渦巻いていた。理不尽な辞令にも、妻の不貞にも、積み重ねてきた52年間が無価値だと告げられたあの声にも私は何も感じなかったのに何故。いや、これまで蓋をして気付かないようにしていたものが今ようやく私という容器の容量を超えたのか。

12年間の単身赴任を終えた私に家での居場所は無かった。正確に言えばそこは記憶の中にある私の家ではなかった。妻は私を異物のように扱い、12年の間に出来上がっていた彼女のリズムに介入することを酷く嫌がった。はっきりと口に出しては言われないが、そういったネガティブな感情は何も言わずとも伝わるものだ。そして、恐らく外に男がいることも。娘が家を出ていたことはかえって良かったのかもしれない。娘と会話をしたのは東京に戻ることが決まった時の電話が最後だが、娘の12年間は彼女をもはや別人にしているに違いなかった。

ある日、妻が帰らなかった日、暗いリビングで一晩考えた末、私は家を出ることにした。なんてことはない、ただ今までと同じに戻るだけだ。すぐに物件探しを始め、知人の紹介で高田馬場のアパートを安く借りられることになった。会社からは乗り換え含めて40分。なかなかいい条件と言えた。珍しく妻と夕食を共にした時に家を出ることを告げると、抑揚の無い声で「そう」とだけ言われた。

考えてみれば原因は山ほどある。家庭のこと。仕事のこと。新卒で入り、約30年勤めてきた会社からは戦力外通告を受けた。かなり柔らかく表現を選んではいたが、要約すると私は会社に必要無いということだった。それでも強制的な辞職を推めることはされなかったので、まだしばらくは金銭的な余裕はある。重要な業務は任せられず、もはややりがいなど何も感じられない仕事だが、私はできる限り残り続けるつもりだった。私にそれを告げたのは電話越しの元同期の声だった。

考え始めると止まらなかった。私が目を背けていただけで、私の人生はとっくに崩れてしまっていたのだ。結婚し、家族を持ち、夢を諦めて積み重ねてきたはずの年月はまるでジェンガのように脆いものだった。

吊り革を握る手に力が篭り、膝から下が崩れそうになる。周りの乗客が不審そうな目で私を見るが、そんなことはもう気にならないほど強烈な絶望が夕暮れの街並から襲いかかってきていた。

商店街の活気、子供を乗せた自転車の母親、遠いビル群の無機質さ。全てが私を拒絶しているように感じた。

娘の顔を思い浮かべようとしたが、それは12年前の情報から更新されないまま、更に劣化した状態のひどく不鮮明な記憶だった。それはただただ喪失感に拍車をかけるだけだった。私の家族も、私の仕事も、もう私のものではなくなっていた。

電車のブレーキに足がもつれる。どうやらどこかの駅に着いたようだ。体を押す人の流れに逆らう気力も湧かず、私はホームに押し出された。思考は停止したまま、ただ流れに身を任せて階段を下りていく。

アナウンスが告げる。新宿と。

9月27日

揺れる頭。遠くで水の流れる音。目を開くと薄暗い照明に照らされた優雅な雰囲気の、しかし一目で虚飾とわかる内装の部屋。おぼろげな記憶を辿りながら眼鏡を探す。枕元にあったそれをかけると視界に映り込んだ女物の下着と共に状況が頭に入り込んできた。そうだ、私は昨夜確か・・・。

「大丈夫？」そんな言葉を掛けられたのは大通りの喧騒から外れ、あまり敷居の高くなさそうなバーか居酒屋を探して飲み屋街を歩いていたときだった。

正面から歩いてくる彼女の存在には気付いていた。20代前半か、娘と同じくらいの年齢に見えた、少女と言っても差し支えない外見のその女は、華も活気もない湿った空気を纏う裏路地にはおよそ似つかわしくない容姿で、終電も無くなったこんな時間のこんな場所とはあまりにもその存在の整合性が取れていなかった。私はその違和感に少なからず興味を引かれていたのだが、このご時世だ。あまりジロジロ見ても面倒ごとになりかねないと思い、やや斜め下に視線を落としてすれ違う準備をしていた。元々2メートルもない道幅で、どうしても交差する瞬間はお互いの存在を意識して体を交わす動きを取らなければならない。その一瞬、彼女は私の目を覗き込んだ。気がした。突然のことに慌てて目を逸らしてしまう。瞬間映り込んだ幼さの残る端正な顔に取り付けられた二つの瞳は、どこまでも深く暗いこの街の影のように、ひたすらに黒く、しかし形容し難い妖艶さを含んでいた。胸が高鳴る。同時に猛烈に湧き上がる情欲に自分自身で驚きつつも、酒で弱った理性を総動員して静まらせた。こんな感情は何年ぶりだろうか。いっそ声をかけてしまおうか。そんな馬鹿げた考えが浮かんでしまうのはやはり酔いが回っているせいだろう。いや、たとえ素面だったとしても私は冷静でいられただろうか。一瞬の間に私の思考は見知らぬ、それも娘ほどの年齢の女に支配されていた。思わず立ち止まり、その後ろ姿を目で追いそうになり、慌てて前を向き直した。いくらこんな日でもそれはない。自嘲気味に笑うとまた歩き出そうとした。淀んだ空気を払うような澄んだ、しかしどこか不協和音とでも言うべきノイズを含んだ声が背後から聞こえたのはその瞬間だった。

はじめ、それが自分に向かって発せられた言葉だと理解するのに時間がかかった。状況を考えればここには私と彼女しかいないのだから当然なのだが、わずかな間に自分の中で膨れ上がった見知らぬ彼女の存在と、かけられた言葉の意味と自分が結びつかず、若干の混乱を生み出していた。振り向くかどうかも一瞬ためらった。いや、普段ならば振り向くという選択肢すら浮かばずにそのまま去っていただろう。それが私という男の人生だった。決して危うきには近寄らず、無害を装って生きてきた。そうなったのは一体いつからだろうか。

「ねえ」再び彼女が声を発するのと私が振り向いたのは同時だった。思っていたより距離が近く、その目線からもやはり私に対して話しかけていたようだった。何か言わなければ。彼女は黙って立ち止まり、私の言葉を待っている。振り向いたことを若干後悔したが、その後悔を上回る高揚も感じていた。喉が焼ける。目頭が熱くなる。まるで思春期の少年じゃないか。あまりに滑稽な自分の状態を笑う余裕もなく、必死に頭を回転させる。「そんなに酔っぱらってるように見えるかな？」脳内でシミュレーションを繰り返し、やっとのことで決定されたそんなセリフはしかし口に出されることはなく、気付くと両頬が熱く濡れる感触があり、彼女の姿が滲んでぼやけた。私は無言のまま涙を流していた。

最後の記憶はぼやけた視界で彼女が微笑んだように見えたところで終わっていた。その後二人で近くのバーに入ったように思えるが、それが何故こんなところで裸で眠っていたのか。いや、この状況を見れば考えるまでもないのだが。どうやらそういうことらしい。行きずりのセックスなんて大学の時以来だから何十年ぶりか。しかもあんな若い子と。私はロリコンだったのか？床に散らばる布の中から自分の下着を探して履くと、浴室の水音が止まった。

少し間を置いて扉が開く。出てきた彼女は髪をまとめて、白く細い裸の上にバスタオルを巻いていた。

「やあ、その、昨日は」

思わず股間が反応してしまうが、平静を装って声をかけた。彼女はというと、うっすら微笑んで「あー」とか「どうも」などと言いながら冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して美味そうに飲んでいた。

風呂上がりの素顔でも非常に整った顔立ちに、細く均整の取れた体。色素の薄そうな肌にはほんのり赤みが差し、ところどころ汗を浮かばせている。改めて見ても私には一生縁がなさそうなほどの美しさだ。一瞬記憶の彼方の妻の裸と比べてしまい、わずかばかりの罪悪感が浮かんだ。

「なんですかジロジロ見て」

彼女がはにかんだように笑った。その笑顔は美しかったが年相応の幼さを感じるもので、昨夜の路地裏で見たどこまでも吸い込まれそうになるような深い安心と恐怖は消え失せていた。酒のせいか、それとも。

「いや、すまない。綺麗だなと思ってね」

「なんですかそれ」

不審に思われないよう適当なセリフを選んでごまかす。そんなことも昨日はできなくなっていた。バーでの記憶もおぼろげだが蘇ってきた。私はどうやらこの年端もいかない少女に泣いて、喚いて、感情をぶつけてしまっていたようだった。

「昨日はみっともないところを見せてしまったみたいだね。その、あまり覚えてないのだけど」

「あー、まあ、かわいかったですよ」

その言葉にドキリとしてしまう。50も過ぎた男がドキリもないものだが、かわいいなどと言われたのは本当に何十年ぶりだろうか。不思議と嫌な気持ちはしなかった。そして、彼女の瞳に昨夜と同じ色が、一瞬、浮かんだ気がした。

駅までの道で、彼女とLINEを交換した。アプリ自体は以前から入れていたが、ほとんど使う機会がなかったため、登録にひどく手間取ってしまった。彼女はそんな私の様子を面白そうに眺めていた。なんとか手探りで彼女のアカウントを追加すると、微笑んで「よくできました」と子供に言うように褒めてくれた。馬鹿にされている気はせず、純粋に嬉しいと感じていた。

改札を過ぎて彼女と別れた。中央線のホームに向かう人の流れに乗りながら、時折振り向き手を振ってくれていた。私も手を振ろうとしてみたが、上げかけた腕がOLに当たりそうになり、慌てて引っ込めた。彼女の姿はすぐに人波に消え、見えなくなった。

山手線のホームに立って時間を見ると、一度帰るにはもう遅すぎた。少し早いがこのまま直接向かうことにしよう。駅前のカフェでモーニングを頼んでもいい。電車が到着し、乗車率の限界を超えて押し込まれていく。私は昨日までとは別人のように晴れやかな気分でうんざりするほど圧縮された人の海の中に立っていた。窓の外を流れる街並はいつもと同じように一日を始めようと動き出していて、私や他の乗客たちもそれに電車ごと飲み込まれていく。娘にLINEでもしてみようか。今朝はそう思えた。

〈続〉

Sleeping double helix

AI TERAMOTO

OFFSTAGE

チーム夜営の
舞台裏をご紹介
第１回

チーム夜営 vol.3「タイトルはご自由に。」チラシメイキング

チーム夜第３回公演「タイトルはご自由に。」（2015.6.19〜21@新宿眼科画廊 地下スペース）のチラシビジュアルのメイキングをご紹介します。チーム夜営は新作の戯曲が完成したタイミングで約半年後の公演を予定し各部署新作の準備を始めます。チラシや Webに掲載する宣伝美術は一番最初に動き出す部署。完成したビジュアルが舞台や映像など他部署の仕事に影響を与えることも多々あります。

イラスト担当
寺本 愛

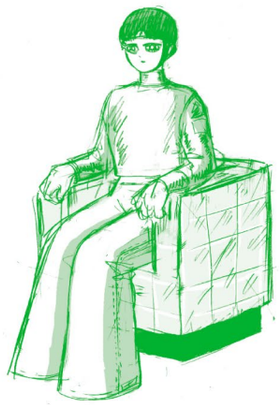
デザイン担当
大竹竜平

STEP 1

大竹

戯曲を展開後、かなりざっくりとしたラフを提出。いたずら書きに見えますが、寺本に自由にイメージしてもらいたいため、あえてのざっくりです。手抜きではありません。「ソファに深く腰掛けた主人公。」「無重力な宇宙空間を漂う主人公。」の２方向をお願い。ユニセックスな人物で服装は宇宙服ではないが、あまり生活感のない感じにとお願いしました。デザインは黒地にイラストを蛍光グリーンの予定です。

STEP 2



▲ 浮遊案

▲ 椅子案

寺本

大竹さんのラフを元にイメージを膨らませてラフを制作。
膨らませすぎて戯曲の雰囲気とだいぶズレて、自分の趣味に寄っている……。

大竹

SFすぎる。ボツ。

STEP 3

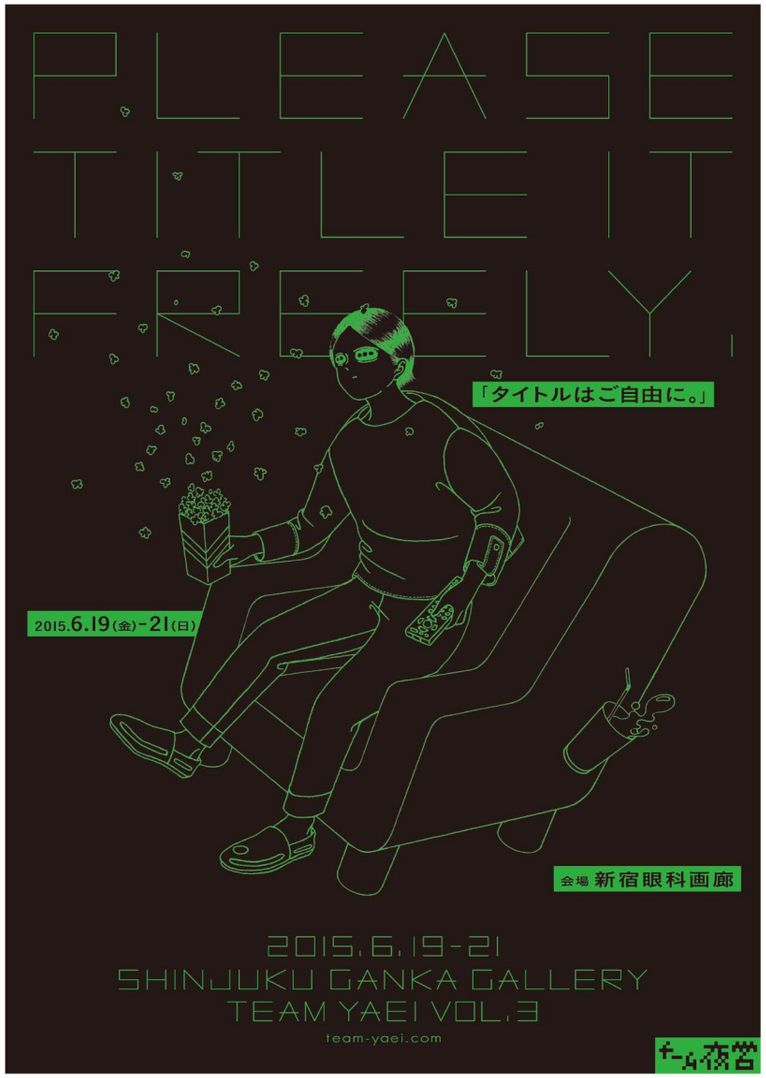
寺本

浮遊案で進めることになったものの、
だいたい絵が決まってきたところで前作「ｙとｘの事情」に似てることに気付きボツに。

大竹

確かに前作に似てる。ボツです。椅子方向でお願いします。

Complete!! 6



大竹

英文を大きく扱ったレイアウトに決定。
イラストの線の太さを英文の文字の太さと揃えてもらうように指定。
寺本が清書を進める間に、英文の作字や最終的なレイアウト調整。
完成したイラストを微調整してようやく完成。おつかれさまでした。

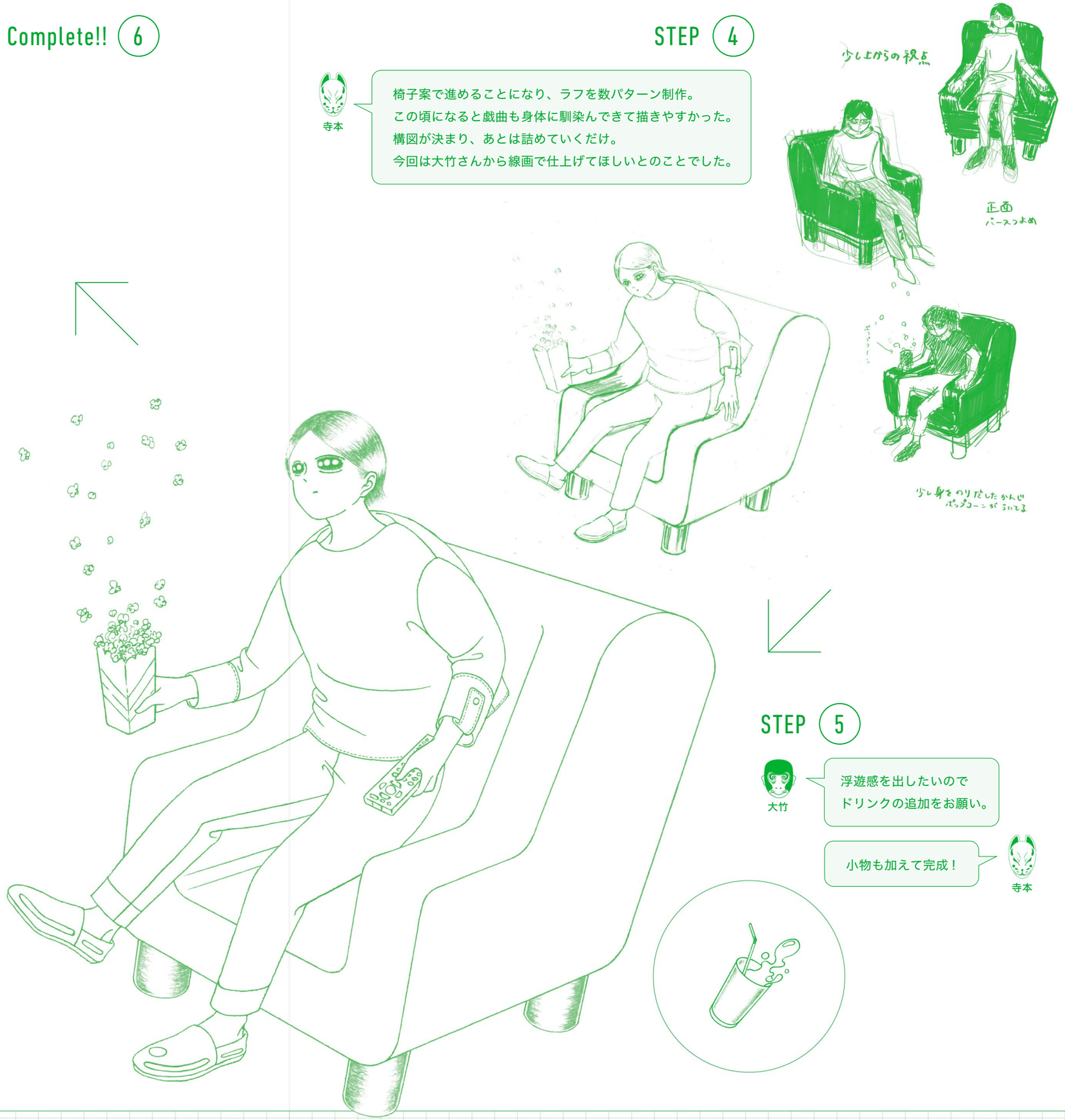
おつかれさまでした〜

寺本

STEP 4

寺本

椅子案で進めることになり、ラフを数パターン制作。
この頃になると戯曲も身体に馴染んできて描きやすかった。
構図が決まり、あとは詰めていくだけ。
今回は大竹さんから線画で仕上げてほしいとのことでした。



STEP 5

大竹

浮遊感を出したいので
ドリンクの追加をお願い。

小物も加えて完成！

寺本

音のくすり

人類が「音を聞く能力」を獲得したのはいつのことだろう。

おそらくはるか昔、まだネズミでもなかったころ、もしかしたら魚のような形をして海中をふらふら泳いでいた頃からすでに音を聞いて暮らしていたのかもしれない。彼らの聞いてきた音はあるときは餌の在り処を知らせ、またあるときは天敵の接近を知らせるなど、なんらかの形で生存に貢献していたはずである。

それでは、「音を音楽として聞く能力」はいつ獲得したのだろう。単なる音の集合に対して何らかの意味を与え、文化として形成していったのはどうしてだろう。それは一見、生存競争に必ずしも必要ではないように思える。

音楽をリズム、調、音色、この3つに大別して、生存との因果関係を考えてみる。まずはリズム。呼吸はリズムである。身体のあらゆる活動（代謝や排泄など）も一定のリズムがあるといえるし、日々の生活にもリズムはある。リズム、あるいは一定の間隔で生じる何かを感じることは、獲物の呼吸を感じ、それに同調するように行動すること―狩りをおこなうのに役に立っていたように思える。狩りをしなくなった現代人でも、子どもの頃にセミやトンボなどの刹那的な動作の洗練によってのみ捕えることが可能な昆虫を前にして、リズム（もしくは間）を感じていた人は多いのではないだろうか（筆者もその一人である）。リズムを感じる能力は少なからず生きる役に立つと思われる。

次に調である。調とは曲の統一感を出す決まりごとのようなものである。長調と短調があり、長調の曲は明るく楽しげな響きを、短調の曲は暗く悲しげな響きをもつといわれている。これを聞き分ける能力とはつまり、音のもつ響きから感情を感じ取る能力だといえる。一瞬の隙が命取りになる自然界において、音のもつ響きの陰影に流暢に耳を傾けている余裕はない。しかし、仮にそういった明るさや暗さ、楽しさや悲しさを音から感じる能力がなかったらどうだっただろうか。仲間の助けを求める悲痛な叫びはだれにも届かず。声色を聞き分けられないので、感情を伝える単純なコミュニケーションもとれない。そうなると一人で生きていかなくてはならず、生き残る確率は群れで暮らすよりもぐっと下がる。単純な発想だが、そう考えられなくもない。調を聞き分ける能力、ひいては音から明暗を感じる能力は仲間とのコミュニケーション的な意味で生存に役立ったと思われる。

最後に音色である。文字通り音のもつ色、質である。これは聞き分けられないと大変困る。同じくらいの高さの音が聞こえても、それがただの風の音なのか、はたまた外敵の威嚇なのか判別できなかったらおちおち眠ることさえできない。当然ながら生きるのに不可欠である。かなり駆け足でまとめてみたが、これらの、あるいはさらにたくさんの、音に対して我々が持っている機能が組み合わさっていったことで「音を音楽として聞く能力」は形作られていったと思われる。

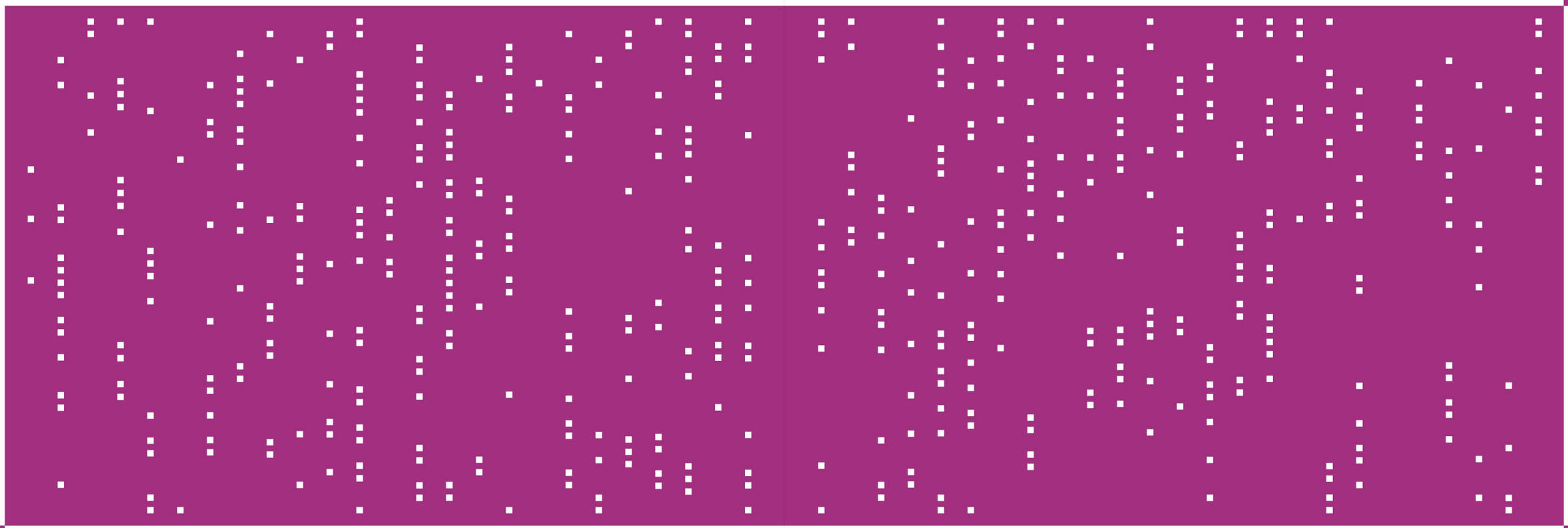
では現代人の生活においてこの能力は必要か。音楽なんてなくても生きていけるような気がするが、生まれてこのかた音楽のある世界でしか生きてきたことがないので一概にそうはいえない。言語が世界中の様々な地域で自然発生的に形作られていったように、音楽もまた人類の歴史の中で自然に生まれたものである。一説には音楽を持たない民族は存在しないとまでいわれているように、人間の生に付随してくる。

生存との因果関係に話を戻すと、現代人の中にあって音楽とは、精神の健康を管理し、心の安定をマネジメントするツールであると考えている。誰だって明るい気持ちで生きていたいと思うはずである。しかし、感情とは大変扱いづらいもので、すぐに沈んだり落ちたり燃えたり冷えたりしてマイナスに傾き、プラスの状態で安定させることは容易ではない。ただ、人は本能的に安定を求める生き物なので、好ましくない現状をどうにかしようとする（または思う）。音楽はそのための足がかりであり、薬である。悲劇を見て感涙すること、ロックバンドのライブで暴れまわること、クラブで4ビートにノりまくること、ジャズ喫茶でコーヒーを嗜むこと、クラシックの演奏会で寝ること。すべては心に作用する。特効薬であり、予防薬でもある。長期的に効くこともあれば、一瞬で全快になることもある。大変すぐれた薬だと思う。

つまり何が言いたいかというと、幸運にも種々雑多な音楽に溢れた時代にこうして生きているのだから、どうせなら楽しんだ方がいいと思うわけである。

20.1 kHz

熊谷 秀哉



シシマイのいた國

文と絵　大竹竜平

近代に入り急激に個体数を減らした野生のシシマイについて論じられた書物は数多くあるが、中でもロベルト・バーンズ氏の著書「アジア・獅子舞の国」は出色の出来に違いない。絶滅種・絶滅危惧種の研究において、バーンズ氏の功績は今なお多くの研究者に偉大な英知と勇気を与え続けており、筆者もその一人に間違いない。そもそも私がシシマイに強く関心を持ったきっかけが彼の仕事であった。バーンズ氏の没後、夫人と息子2人が相続した絶滅危惧動物に関する大量の学術書の一部を日本の大学に寄贈してくださることとなり、筆者が窓口になったことが契機である。最もその資料は遺産のごくごく一部であり、風呂桶の水を御猪口に一杯頂戴した程度だと言っても言い過ぎではない。バーンズ氏から日本に寄贈された貴重で奇妙な文献の大部分が日本のシシマイに関するレポートであり、整理、保存の作業にあたって私は自然とこの不思議な生物に魅了されることになったのである。この場を借りて、シシマイについて私の知っていることを語っていきたい。少しでも多くの読者がこの不思議な生物への理解を深め、また興味を抱くきっかけとなれば幸いである。

■シシマイ

19世紀初め、シシマイはインド・中国・日本などアジア全域に生息していた。世界中で個体数の急激な減少が見られたのは20世紀に入ってからで、原因は大規模な森林伐採や温暖化、常食していた植物種の減少。そして一部の人間による大量乱獲とされている。また人工的な繁殖が難しかったことが減少の要因とされており、WWFを中心に世界中で本格的な保護活動が始まる頃にはオグロシシマイやアシダカシシマイなどすでに多くの種が絶滅に貧していた。

日本では1932年青森県の恐山の麓で目撃されたのを最後に完全に姿を消したとされている。1980年に新潟県でニホンシシマイの糞が採取されたと報道があり世間を騒がせたが、後に専門家からニホンジカの糞であると否定された。50年以上確実な目撃情報がなかったため、環境省は正式に国内のニホンシシマイを絶滅種に認定した。現在、中国の華北地域にシシマイの亜種は若干数確認されてはいるがジャイアンパンダに比べてその存在感や注目度は低く、国と国民は無関心を決めている。有識者の間ではシシマイの醜悪な顔の造形、愛嬌の無さ、ひどい噛み癖、ボロ風呂敷のような外皮、黴くさい独特な臭いが人気の無さの原因だと言われており、一部の団体が人気の獲得に向けて地道な努力を続けている。

絶滅したニホンシシマイは寒く乾いた環境を好み、主に東北の山間部に生息していた。木の皮や根、落ちている木ノ実を食していたと言われ、特徴的な大きな口から見える歯は全てが臼歯型であり、硬い木ノ実を粉砕するのに適していた。この歯は象のように生きている間に何度も生え変わったとされている。また、発達した下顎を上下に動かし歯をカチカチと鳴らしながら踊り、求愛行動を行う事でも有名である。個体の大きさにバラツキがあるのも特徴的で、一般的には成人男性2人分の重量であったが、小さいものだと人間の幼児サイズで成体とされるものもいた。現在ニホンシシマイの体長を確認できる資料は、数枚の写真と状態の悪い剥製、古い民家や寺院の柱に残された歯形による推定のみであり、その生態の全貌を理解するには各地域に残された文献や伝承に頼るほかない。数多くの地域で、シシマイが人里に降りて幼い子供を食べたという伝承が残るが、これは大変な誤解である。シシマイは顔に似合わず臆病な性格で滅多に人前に姿を現すことはなく、きわめて温厚な生き物であった。このような誤解を生んだのも動物の体毛を好んで食べるという奇妙な習性のせいである。シシマイは不足しがちなタンパク質を摂取するため、山中に落ちている狐や山犬の抜け毛を食べていたとされる。後述するが、森と生きる人〈獅人〉がシシマイを手なずけ、彼らが頻繁にシシマイを人里に連れてくるようになってから人間の頭髪を食べる癖が身に付き、その標的となった子どもたちが顔面の造形に恐れ戦き泣き出したのが誤解の始まりだ。

ここまでかなり大雑把に早足で日本のシシマイについて語ってきた。近年、残されたデータの解析精度が上がるにつれてシシマイの行動範囲や発生の起源など新たな真実が明るみになり、語るべきことは尽きないのだが、そういった研究成果の発表は紙幅の都合ひとまず置いておく。この生き物を理解するに当たって最も忘れてはならないのがシシマイと供に暮らした人間の存在であり、彼らを無視してシシマイを理解したなどとは決して言えないからだ。シシマイを語るということは、同時に獅人を語るということに違いない。観察するということは、観察する者の存在を無視しては成立しない。最も観察してきた人間が消え去った現代において、観察してきた人間の痕跡や、それを遠くで見守ってきた者の言葉を借りて彼らの生態を探求する訳だから、必ずしもそれは正しい全貌だとは言い切れない。そういう意味では、私のような絶滅動物の研究者というのは幽霊や妖怪、妖精を信じる人々とそう変わらない。

■獅人

さて、獅人とは唯一シシマイと共生することが許された人間たちの名前である。彼らは二人一組で行動し、木を掘り上げた動物の面を被ってシシマイと供に生きてきた。日本では北海道の冬辺一族が有名で、特に冬辺イチコとワシリの兄妹について残された文献は際立って多く、今でも彼らの仕事をまとめた伝奇やモデルにした小説が出版されるほど一部の人間には人気がある。バーンズ氏の「アジア・獅子舞の国」も日本のシシマイに関しては獅人の生業や生活についてページの大部分が割かれている。氏は僅か1年間の日本滞在で北海道から福島まで、かつてシシマイが多く見られた地域を単身で行脚しその記録を本にまとめて後世に残したのである。氏の日本での研究記録については上谷守「獅人　―伝承と大地―」に詳しくまとめられているので機会があれば一読してもらいたい。

イチコとワシリは1850年（嘉永3年）北海道の渡島の生まれであり、先祖代々受け継がれてきた獅人の純粋な後継者であった。父親のイタクマは北海道では名のある獅人で、渡島一体のニホンシシマイの管理を任されていたとされている。冬辺一族に限らず、当時の日本では100組以上の獅人がいたとされ、シシマイの減少と供に彼らも姿を消し絶滅と供に完全に役目を終えた。日本の最後の獅人とされるのが、兄の冬辺イチコと妹ワシリである。彼らは幼い頃から父と供に毎日山へ出かけ、野生のシシマイと触れ合ってきた。その頃、父イタクマとコンビを組んでいたのが叔父のマコシであり、彼は実の父以上に兄弟たちを可愛がり獅人に必要な知識や技術を熱心に教えたとされている。

獅人は御拍子と舞人の二役に分かれて野生のシシマイを手なずけ、森を管理するのが生業とされてきた。御拍子を務めるものは竹でできた長笛を構えて、シシマイの鳴き声に似せて腰につけた木魚をたたいた。両の手で笛を構え森に乾いた音色を響かせながら、器用に腰の木魚を突き上げた膝で叩くのが御拍子の役目である。対して舞人は御拍子の先を歩き、獣道を竹の鞭と鎌で分け入って道を先導した。笛の音に引き寄せられたシシマイと運良く出会えば、すかさず舞人は面を被って腰を振り、膝や肘をがくがくと揺すって舞を踊る。大抵のシシマイは好奇心が強いが、臆病な性格で獅子人と出会ってもすぐに逃げ出すか、歯を鳴らして威嚇し近くの木々を固い頭で小突いて暴れた。そこで御拍子は出会ったシシマイを良く観察して、その性格に合わせてシシマイの心情（獅人はそれを獅音と呼んだ）に寄り添ったリズムを探して指を動かした。その間、舞人は気が狂ったように体中の関節を揺らす。シシマイが足を止め舞人に目を奪われ、笛の音色に小刻み身体を揺らし始めればすでに彼らのグルーヴがシシマイを虜にした証だ。3匹の獣が群れ踊る森はまるで自然のダンスホール。大木の枝から木漏れる日の光はグルーヴィーで、一心不乱に腰を振り肘を折る彼らのマジでドープな世界。すっかり目は落ちて、満月が山に濃い影を落とし始めると踊りは最高潮に達する。漏れる息は火を吹くより熱く、落とし続けた腰は地面を稲妻形に削り、足下には失神した蛇や小動物が散らばっている。踊りは獅人かシシマイのどちらかが倒れるまで夜通し続く。山の冷気が彼らの汗を冷やし、やがてそれが濃い霧に変わると一筋の朝日が彼らをスポットライトのように照らすのだ。霧の中を3つの影が蠢き、ひとつに混ざり、また3つに分かれる。山鳩がその日最初の鳴き声を上げたのを合図に影は地面に吸い込まれるようにして消える。空が白み、霧が晴れると3匹の獣は死骸のように横たわっているのである。彼らは目を覚ますと互いに一度だけ目を合わせ、振り返ること無く気だるい頭で家路につくのだ。それを何度か繰り返して、ようやくシシマイは獅人に懐いた。そして、これが日本のクラヴ文化の元祖となることを彼らはまだ知らない。

そうしていつしかシシマイは日本から姿を消し、獅人は里へ降りてネクタイを締めた。今でも彼らのグルーヴは日本人の血潮に流れ続けている。夜のしじまに耳を傾ければ、今も都会のどこかでカタカタカタと侘びしい獅子の歯音が聞こえるようだ。

参考文献：「アジア・獅子舞の国」ロベルト・バーンズ
「絶滅種大全9　アジア」
「シシマイと旅した50年」近藤数利
「獅人　―伝承と大地―」上谷守

協　力：青森県ニホンシシマイ研究所

ソー
ファイン

SO fine

Text & Painting Takazawa Satomi

ふらりと立ち寄った喫茶店のトイレの便座がびしょ濡れだった時の話。

便座から手洗いまでは60センチくらいでこっから飛び散ったってこともあるかと思ったけど手洗いの蛇口は おす を押した1秒後にはほんの気持ち程度の水が止まる仕様になっていてこれは無い。

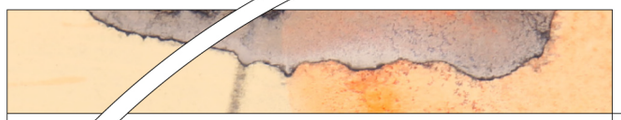
もう一度便座の方へ目を向けるとペーパーホルダーの直ぐ横にギザギザに切り取られた黒い画用紙に白い文字で、『便器が外れやすくなっておりますのでご注意下さい！！』

『！！』に少々ビビりながらもきっとこの状況に出会った誰もがそうするようにトイレットペーパーで便座を2周くらい拭いてから無事用を済ませて席に戻りオリジナルブレンドティーの香りを確かめる。

1

JR中央線西国分寺駅から府中街道を所沢方面に行く途中にその広い竹やぶはあって、夏の夜なんかはムクドリがうるさかった。そのあたりはカラオケとかコンビニもあって、大型の道路工事もしているし結構明るい。でも竹やぶだけはなぜか真っ暗、マットな黒。それなのに生き物の気配だけはものすごくあってまあ気持ち悪い。

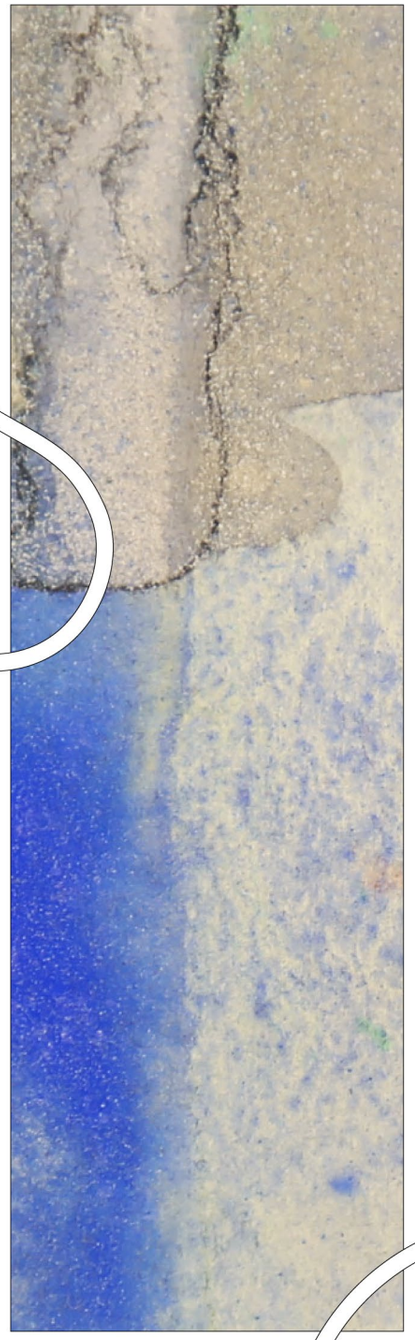
竹やぶの脇の細い通路は家に帰るには近道なんだけどいかんせん街灯も無いから怖くてひとりのときは絶対に通らない。早く帰りたいからってその道に入ったら必ず後悔する。怖くて何回も後ろを振り返ったり玄関の外に洗濯機があるタイプの古いアパートの真っ暗な階段をなるべく視界に入れないようにしたりしながら誰が入るともわからない竹やぶの入り口の小さい門がいつも閉まってるのを確認して急ぎ足で抜ける。生えてる竹はすべからく心なしかその敷地の中央に向かって斜めに生えている感じの密度も背も高い竹やぶ。



2

3

終電なくして　西国分寺駅から自宅まで歩いて帰っていた時のこと。府中街道をただただまっすぐ小一時間、これでも結構楽しいもんですよ。そうそう、去年の11月はそんなに寒くなかったよね。あまりに急なことだったからもうよく覚えてないんだけど、いつものあの竹やぶがなかった。なくなってた。綺麗な茶色、生きのいい土っていうのかな、広ーい広ーい敷地に生きのいい土。それからユンボが一機、深夜だから眠ってるみたいに静かに休んでる。つーかここんなに広かったんだ。それだけ。

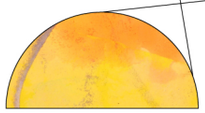


4

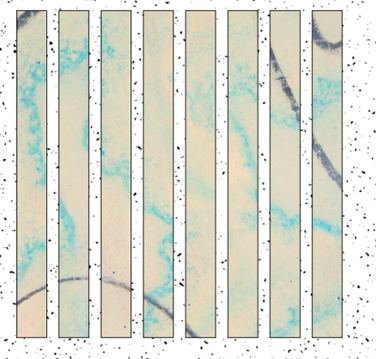
死を救いとする場所の話
ありとあらゆる国のひとがそれぞれの信仰する宗教によって葬られる場所
ただひとつ皆等しく信じていることは人生の途中で死を選ぶことで今という現実から救われるのだということ。
漫画とゲームをやりながら順番を待つ。この場所の入り口は自らの住む地域の中の隙間隙間にある。わたしは確か病院の帰りにきたかも。病院で一緒になった同世代くらいの女の子も何人かそこへ消えていった。
お母さんと妹を救おうとしたけれど、何故か子供には監視のような20後半くらいの男が付いている。妹は20歳を超えているのにひどく幼く見える。
大きな斎場、といってもそとだけれどこれは絵本の中みたいに何の心配もない広〜いそと。
天井はパステルで絵に描いたような青空、ゆかはどこまでも続くパステルの柔らかい芝。たくさんのひとが祈っている。大きな山、教会っぽいアーチ状の入り口、全部炭っぽい色。恐らくこれは壁。アーチの向こうには死、とにかくこの世からいなくなる。
国や宗教別に死を獲得していった方々の写真が置かれている。かれはどこどこのお父さん、娘さんを残してる。かれはなんかちょっと泣いてるみたい。知っている気がする人だったから目に付いた。もういない。
一旦帰宅したいと申し出てまたすぐに戻ってくるということになった。基本的にはだれも監視していない、というか日本人同士で何となくしている程度なので出入りは自由。あくまで個人行動であることは暗黙の了解のよう。今夜とりあえず現世へ行ってくるね、の間際にお母さんが、戦時中の母みたいな顔色とトーンで、戻る時にどれどれ、確か漫画の名前、を12巻くらいまで持ってきてくれない？と言ってきた。わかった、つか結構多いなとおもうのと同時にけど本当にまたここへ戻って救いだというところの死を選ぶか分からないというかきっと戻らないっていう顔をお母さんにむけたら戦時中の母みたいな顔色とトーンでわたしにちょっと微笑んだ。
いてもたってもいられなくてお母さんにすごくすごく小さい声で一緒に戻ろうって言った。そしたらやっぱり生への欲が捨てきれてない自分にやるせなさを覚えるみたいな顔に一瞬でなったからもう一回言った、一緒に戻ろう、生きるのを選ぼう。それから出口、これはプールの出入り口みたいな施設感のある出口でたらすぐ階段、地下鉄の駅の階段みたいな、そこへ行く手前に妹が監視の男といる部屋というかクローゼットがあって丁度寝る前のトイレに行くとこだった。この扉が閉まれば2人で出れる。けど妹をどうする？男と世間話確か桑田佳祐とかの話をしながらずっと考えた。妹が眠そうに公共プールにあるようなトイレからもどってくる。
妹にちょっと、って言ったら男がいやに笑いながらなんか言ってた。思惑は簡単にばれる。お母さんをおいて妹と暗い向こうの部屋へ。細心の注意を払って言う、一緒に戻ろう。すると激しく拒否する妹。死が救いであると完全に信じているというかなにも自分の頭で考えてないそれがすぐに見て取れる顔、妹はいいかもしれないけどわたしが嫌だ。連れて帰りたい。でも帰っても無理かもしれないこの思考では。無理に飲まされたくない。とか何とか言ってる。大丈夫、大丈夫、死よりも大丈夫、って何回も小さい声で強く言うんだけど激しく首を振って丸い目をこちらに向けて眉毛はハノジ、わたしの話を聞いてない、考えてない、もうダメだ。妹はあの男に言うわたしもお母さんも戻ってこないと。
妹より先にお母さんのとこへ行ってすぐにここを出なきゃ。

5

しっとりしていきのいい土だったのが、どこからか持ってきた砂利に変わり、簡易的な立ち入り禁止のポール（これもどこからか持ってきたらしい）が敷地を囲んだ。相変わらずユンボが一機。竹はどこへ？



6



1月29日（月）　型枠工

1月30日（火）　型枠工

2月1日（水）　ベースコン

2月2日（木）　型枠工

2月3日（金）　型枠工

2月4日（土）　基礎コン

2月5日（日）　現場全体

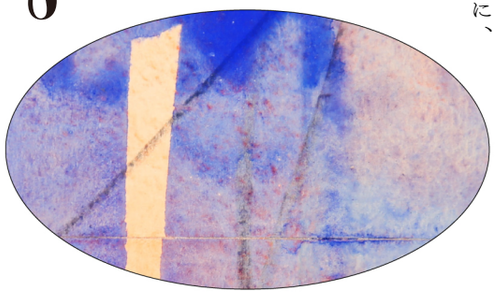
←2月6日（月）より埋め戻し工事開始←

7

夏の日の竹やぶは風通しが良くて、目の前の信号機がなかなか青にならないことも、車が渋滞ぎみなことも、青になった瞬間にチカチカしだすことも、「なんだかよくわかんないけど気持ちいいよね」ってな感じであやふやにしていた。ストレスフリーな道。日中に竹やぶのあたりを通る時はだいたい自転車にのっているから脇の細い通路もスイーッと気持ちいい。おまけにそこを抜けたらすぐ庭がハーブだらけの金持ちを絵に描いたような家、そこを通るだけで視力が0.02くらい上がる気がする。家の空いたスペースでカフェなんかやっちゃってて、これは想像だけど絶対ハーブティー出しちゃったりして。なんか肌も綺麗になった気がする。通るだけで。

このまっさらで寒々しい敷地が今年も、夏をむかえられればと思う。

8



2017年1月
得体の知れない竹やぶであった場所は
わたしの背より30センチくらい高い簡易的な壁に囲まれた。
中は見えない。ユンボも見えない。
およそ3000平米のこの敷地に建てているものが
建て売りの住宅であるように、
ひとが棲む場所であるように、
なぜか祈っている。

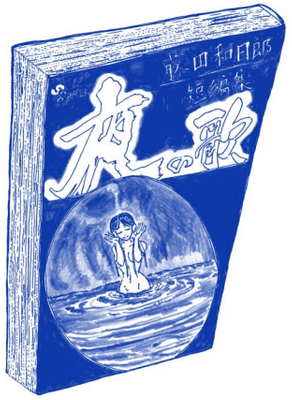
fin

RECOMMEND THEME「夜」

レコメンド

チーム夜営のメンバーが共通のテーマを
設けてオススメの映画や書籍を紹介します。
第一回のテーマは「夜」です。

漫画



「夜の歌」藤田和日郎

「うしおととら」「からくりサーカス」の藤田和日郎の初期短編集。表題通りそれぞれの人物の抱える「夜」への苦しみや葛藤をしつこいくらいに描きながら、それでも「夜」はいつか明けるものだという希望を提示する作品群。その良くも悪くもトラウマ級の衝撃を与えてくれる作風は、独特の間の使い方や一枚絵の迫力も含めて、後々の作品まで「藤田節」として作者の色となっている。現在は週刊少年サンデーにて「双亡亭壊すべし」を連載中。こちらも第一話から圧巻の藤田節。

演出：小林弘樹

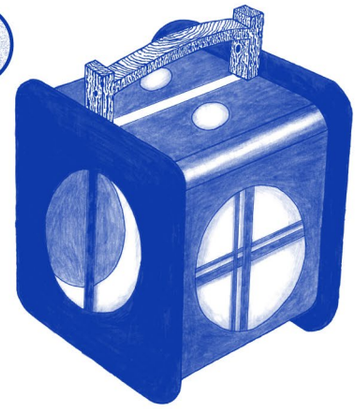
観光

臨江街觀光夜市（台北／台湾）

美術館、劇場、書店、文化の集まる台北市。夜は、コンビニで買ったビールを片手に屋台の集まる夜市へ。小籠包、魯肉飯などの定番から、美味しいけど香辛料入れすぎて一体どのスパイスが効いてるのか作ってるほうも分からなくなってるんじゃないかと思うような未知の味を楽しんだ後は、足つぼマッサージへ。夢見心地の時間を過ごしたら、〆めは愛玉之夢遊仙草のオーギョーチゼリー。550 ニュー台湾ドル（2,000 円）あれば、贅沢台北夜遊び。

M.H

照明

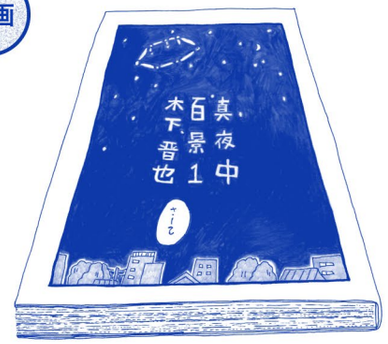


有明行灯

江戸時代の照明器具。枕元に置き、夜明け（有明）まで明かりを灯しておくために使われていた。四角いシルエットに満月と三日月をかたどった窓が美しい。我が家が木造賃貸でなければ実際に火を入れて使ってみたいものである。深川江戸資料館（江東区）で実物を見たときはやや大きすぎる印象を受けたので、一回り小さいものが欲しい。

照明：竹元楓

漫画



「真夜中百景」木下晋也

恋人たちや大学生やおっさん達やタクシードライバー、吸血鬼やらベートーベン、あらゆる夜の情景をゆるーく切り取る四コマ。劇的なことは何も起こりません。何を期待して読む訳ではないのですが、ほほぅそうきますか的な発想が次々くるので、ゆるゆると最後まで読めます。全部ちゃんと真夜中の時間帯なのもポイント。

役者：山川恭平

食

夜食・鯖の水煮缶

玉ねぎ（1/4 個）を薄切りにして水にさらす。皿に盛る。その上に汁を切った鯖缶をのせる。マヨネーズを好きなだけ、七味をたっぷり、醤油をちょろっと垂らして完成。一番好きな夜食。玉ねぎに安心しちゃうけど、十分高カロリーです。

イラストレーション：寺本愛

映画

「ミッドナイトクロス」ブライアン・デ・パルマ

B 級映画の音響効果マンを務めるジャックは映画に使う効果音をサンプリングしに出かけた夜にある交通事故を目撃する。その夜ジャックが収録した音声には有り触れた事故が重大な事件に変わる秘密が隠されていた。監督でも俳優でもなく、音響マンが持ち前のマニアックな技術で事件の真相に迫り、ヒロインを追っ手から逃そうと奮闘する姿には裏方愛が滲み出る。職人魂とも職業病とも取れる夜の「ニュー・シネマ・パラダイス」的ラストシーンは必見。

映像：内田圭

小説

「良い夜を持っている」円城 塔

超人的な記憶力を持つことで過去と現在の区別がつかず、時間の概念がうまく理解できない父とその息子の物語。絶対に忘れない人間が世界を理解すること、そんな特別な人間を理解することを描いた作品。現実と想像、過去と現在が折り重なった世界に引き込まれて気が付くと夜が更けてしまう 1 冊。超記憶や超学習能力を扱った小説に興味があればボルヘス「記憶の人、フネス」やマーク・ハッドン「夜中に犬に起こった奇妙な事件」もオススメ。

脚本：大竹竜平

映画

「ナイト・オン・ザ・プラネット」ジム・ジャームッシュ

ロサンゼルス、ニューヨーク、パリ、ローマ、ヘルシンキ。5 つの都市での同じ夜の、タクシードライバーの物語をオムニバス形式で綴った映画。それぞれの場所で起こることは、大事件でもなんでもなく、日常にふと現れるちょっとした異変。翻弄され、巻き込まれる人間のおかしさ、いとしさは、国境を越えても同じ。映像から感じる、それぞれの国の夜の「重さ」が美しい。小気味のいい言葉運びも気持ちいい作品。

役者：萩原優奈

illustration 山川恭平

YONABE Vol.1

掲載作家紹介

(掲載順に記載)

表紙・目次 イラスト

田口ともは [作家]

1991年生まれ。2013年武蔵野美術大学映像学科卒業。2012年チーム夜営「そのつぎ」(武蔵野美術大学)に映像、音響として参加。南風とクジラ「学園地獄」のジャケットデザインを手がけた他、テレビアニメ「双星の陰陽師」(2016〜2017年放送) の ED 映像を担当。また anderlust ショートムービーコンペティションにて優秀作品として選出される。その他にもイラストレーションや漫画、映像などを制作。

HP : icn321.tumblr.com

小林峻也のケバブ食べ歩きへようこそ in Berlin

P 03 - 06

小林峻也 [舞台美術家]

1990年生まれ。2013年武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業。2012年からチーム夜営の舞台美術を担当。2017年よりベルリン工科大学大学院に在学中。

HP : takayakobayashi.com

変

P 07 - 08

萩原優奈 [演出家・俳優]

1993年生まれ。2017年武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒業。同大学内で在学中に設立、企画されたオリジナル・ミュージカル団体 CAMP にて、2015年に第二回公演『パラダイス』で初めて主催・脚本・演出を務める。チーム夜営には vol.3『タイトルはご自由に。』で制作として初参加、vol.4『衛星の兄弟』では役者を務める。2017 年に同大学の卒業制作として演劇パフォーマンス作品『水槽の中の魚たち』を発表。同年から舞台作品の宣伝美術も手がける。

twitter: @bintorochan

サービスタイム

P 09 - 12

小林弘樹 [演出家・俳優]

1987年生まれ。武蔵野美術大学在学中に演劇活動を開始し、CET10『ラウンジの屋上』、犬犬『サンライズホテル』等で演出を手がける。チーム夜営には演出、俳優として参加。近現代の文化、風俗に関心を持ち、作品のテーマとする。

Sleeping double helix

P 13 - 14

寺本愛 [アーティスト / イラストレーター]

1990年生まれ。特有の地域・服飾文化に生きる人間をテーマに個展等で数多く作品を発表するほか、雑誌や広告のイラストレーションを手がける。第 9 回グラフィック「1_WALL」グランプリ、第31回「ザ・チョイス」年度賞大賞受賞。Vol.2『y と x の事情』より毎公演のフライヤーイラストレーションを担当、スピンオフ漫画等も手がける。

HP : aiteramoto.com

20.1 kH

P 19 - 20

熊谷秀哉

2017年武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒業。在学時より独学で作曲、ミックス、マスタリングを手掛ける。チーム夜営には vol.3「タイトルはご自由に」にて音響、音楽として初参加。

SoundCloud 準備中

シシマイのいた國

P 21 - 22

大竹竜平 [グラフィックデザイナー]

1988年生まれ。デザイナー。

チーム夜営では脚本と宣伝美術を担当。

HP : ryuhei-otake.com

so fine

P 23 - 28

高澤聡美 [アーティスト・俳優]

1991年生まれ。2011年より四方謙一氏に師事。アーティスト活動を積極的に行うほか、演者として多数の舞台・映像作品に参加。2016年、MADlab にて初個展『烏合のひと disorderly individual』を行う。主な出演作はトリコロールケーキ『アイアイ』(2014年)、『クマグマ』(2014年)、『モグララ』(2016年)、『誰がいつ泣くの』(2016年)、マシュマロウェーブ『ブランチ』(2016年)、神蔵美子監督作品『雪子の部屋』(2017年)。チーム夜営では Vol.3『タイトルはご自由に。』、vol.4『衛星の兄弟』に出演。

HP : http://satomzawa.tumblr.com

RECOMMEND イラスト

P 29 - 30

山川恭平【俳優・イラストレーター】

1989年生まれ。2013年武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。在学中に演劇活動を開始し、現在では小劇場を中心に活動中。童貞下ネタコメディーユニット Peachboys の一員。同ユニットでは KYOKYO と名乗る。近年の出演作は20歳の国『花園 RED/BLUE』、Peachboys『3年B組金玉先生 〜ロン毛バケーション〜』、劇団竹『待つなセリヌンティウス』、鬼の居ぬ間に『土蜘蛛 - 八つ足の檻 -』。チーム夜営には『そのつぎ』では役者として、『y と x の事情』では演出助手として参加。

Twitter:@higekaaaaan